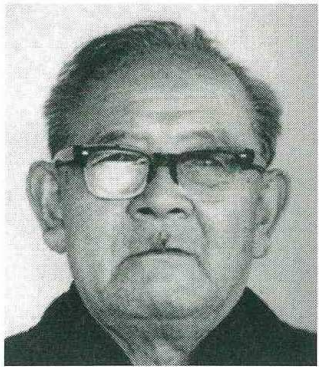


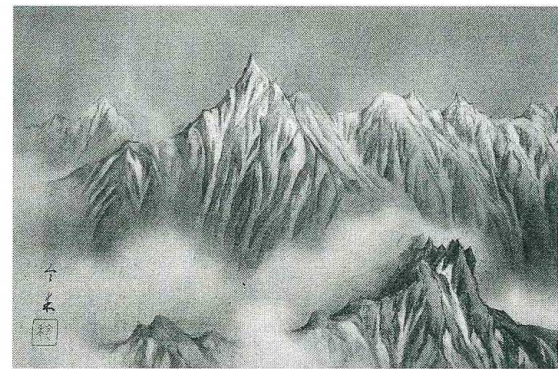
高山の文化を高めた人々 54

山に魅せられた画家
富田 稔彦(令禾)

田中 彰



富田稔彦は飛騨を代表する画人・歌人・郷土史家である。稔彦は斐太中学を卒業（第二十四回）後上京し、東京美術学校に入学したが病のため途中で退学した。その後、京都絵画専門学校に入学し、卒業後は菊池契月に師事している。京都で画業に専念し、京都市展に六回入賞。雅号を「位峰」とし、その後「令禾」に改めた。昭和二十年三月、疎開のため高山に戻った。



山岳画を多く描くかたわら、短歌、郷土史の分野でも活躍した。昭和二十一年一月、大埜間霽江、鎌手白映の主唱による飛騨短歌会に参加し、翌年には福田夕咲らと共に「道づれ吟社」を発会させている。昭和五十一年九月、市制四十周年にあたり、市芸術文化顕彰を受けた。

山岳画を目指したきつかけは、斐太中学二年の夏、友人と二人で初めて上高地まで歩いたことから始まる。この時山岳ガイドで有名な「嘉門治」の歓迎を受けて、雑炊を馳走になり、仙境のような上高地周辺の印象に強い感銘を受けた。嘉門治は明神池畔に小屋を建て、猟を生活の中心とし、山の案内人もしていた。明治

二十六年、イギリスの宣教師ウォルター・ウエストンを穂高岳へ案内したことでも知られる。

稔彦はその後、何度も何度も飛騨山脈を歩き、山の美しさや怖ろしさ、エピソードなどを周囲によく語った。登山に惹かれてゆく過程には、山を愛し山とともに生きてきた人との接触があった。中学生時代に嘉門治に出会い、上高地から登れる穂高、蝶ヶ岳、槍ヶ岳を知ることにより、山への畏敬の念と信仰心が増幅していった。そしてそれが稔彦の執筆活動や画業に幅広い影響を与えた。こうした飛騨山脈への思いを強く反映した絵は、稜線と谷の残雪が力強い線と色彩で描かれ、稔彦独特の山岳画に仕上がっている。

優しさがあふれている。また、著書、投稿には次のものがある。『飛騨の伝説』上下二冊、『飛騨の高山』、大正三年から富田位峰の名で飛騨史壇に「郷土史の威厳」「我観録」「山島民族の旗幟」等を投稿。また、昭和十二年からは『ひだびと』や『飛騨春秋』に投稿を続けた。そのほか、角竹喜登の高山市史編纂に資料を提供し、また丹生川村史、宮村史、莊川村史、神岡町史編纂にも多くの資料を提供し、協力をしている。

＊ ＊ ＊

明治二十六年四月十三日生
昭和六十年五月二十九日没
富田家は高山陣屋の地役人を勤めた家柄。

飛騨国の地誌を詳細に記述した『斐太後風土記』を編纂した国学者富田禮彦はその一人で、稔彦は禮彦のひ孫。

山岳ガイドで有名な「嘉門治」の歓迎を受けて、雑炊を馳走になり、仙境のような上高地周辺の印象に強い感銘を受けた。嘉門治は明神池畔に小屋を建て、猟を生活の中心とし、山の案内人もしていた。明治

下の「鯉の滝のぼり」は、鯉にとつて厳しい場面でありながら、繊細な水しぶきに囲まれた静けさを感じられる。この絵には生命に対する



「鯉の滝のぼり」